

*steci mento de Brasília* (Brasília, 1969), pp.31~  
38, Quadro VIII から計算。

rura) という農業集落が多く発生したが、なかでも、最も近接した六つのヌクレオはかなり成功している。その典型は衛星都市タグァチンガの郊外で、農協組織をもつ約30戸の日系農家が生産の中核となっている。この集約的農業のために、サン・パウロから大量の肥料が移入されている。また農家の間にも、作物について分業化が起りつつあるのが観察される。

1964年半ばから、政府の食料供給を担当する機関が地域の農業製品を原料とする加工工業の設立を促進し、現在、大豆、綿種子、トウモロコシの食料油、サトウキビからのアルコール、精米所、家畜飼料、ミルク精製所などが出現しつつある。将来は、ブラジルからサン・パウロ市、ペロ・オリゾンテ市に走るハイウェイぞいに多くの工場がたち並び、連邦区の住民により多くの雇用を与えることになろう。衛星都市も発達し、サービス部門に従事する有業人口の比率も高まることが予想される。

(注1) Ludwig, p. 195.

おわりに

ブラジルは1950年代後半の政治情勢の中で、クビチェッキ大統領のイニシアティブによって短期間に建設された。当初意図された政治的な目標、機能はすべて実現したといえよう。現在では、ブラジルがナショナル

ムのシンボルとして確立され、いかなる政権も、遷都の決定をくつがえせない事実もその一例である。現在の連邦区の人口は約50万人だが、1975年には100万に達するものと思われる。

経済構造においては、プラノ・ピロト地区に住む官吏などの中以上の階層と、周辺の衛星都市、スラム地区に住む建設労働者などの下層の間に大きな隔差が存在している。そして、連邦区の経済活動は、政府の公共支出、国会行政活動の規模、水準に依存している。

1968年末の国会閉鎖は、すでに紹介した統計の示すように、ブラジルの経済活動に大きな打撃を与えた。けっきょく、問題は労働集約的軽工業が未発達なこと、近郊農業が食料供給の過半を担当するまでに発達していないことのようなのである。首都の政治行政機能の充実、人口の増大とともに、市場規模の拡大、分業化が行なわれることが期待され、その可能性はかなりあると思われる。

純経済的にいえば、10億ドルを費した新首都は人口重心の西への分散、内陸部の開発、国土の統一という効果を投資額に見合う水準で生んでいないというほうが卒直であろう。しかし外国向けの玄関を美化し、飛行機で首都と大都市の空港近くだけを見てまわる外国の政治家財界人などに、ブラジルに関するよりよい印象を与えるための一種の政治的観光資源を作ったとすれば、それはかなりの成果を生んだと考えるのは皮肉すぎるだろうか？。

所 報

◆出版案内

1. アジア経済調査研究報告双書  
第180集『アジアの鉄鋼業』

◆外国人の来訪

- (1) 5月13日  
Dr. Leon Bagramov (ソ連科学アカデミー世界経済  
国際関係研究所部長)
- (2) 5月26日  
Mr. Youn-Hevi Wook (Economic Scientific

Advisory Council to the President, Republic of  
Korea)

◆在外職員の動き

帰 国

氏 名	派遣地	課 題 名	帰国月日
小牧輝夫 (海外派遣員)	ソウル	韓国における社会経済 構造の発展過程	5月31日